発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話 ③3033番 ③3034番
編集兼発行人 渋田紀生
年間600円 送料共

下河さんは業務死

組合の主張遂に通る

福岡労働基準監督局「遺族補償を支払う」

このほど福岡県労働基準監督局から故下河竹次さん（CO患者ですでに死亡）の未亡人＝美枝子さんのもとに、「遺族補償を支払う」との決定通知があった。逝去してから三年ぶりに「CO中毒による業務上死亡」が認められたわけで、当然のことながら、三池労組のかねての主張の正しさが改めて証明されたことになり、CO闘争にいっそう自信をもつべきである。

故下河さんは、CO中毒症治療のために入院中の熊大病院で、去る昭和四十四年四月一日に逝去した。

下河さんの死の数日前の写真（熊大病院で）
向つて左の端の人が、未亡人の美枝子さん。
がんばつてほしい。

下河さんは、昭和四十一年十月における、CO患者に対する労災補償打ち切りの際、長期療養補償をこそ与えられなかったにしても、経過観察が必要な患者とされたほどのCO患者だった。従って

その死は、明らかに「CO中毒にもとづく業務上死亡」のほかに考えられることではなかった。

それにもかかわらず、当時三井鉱山はもちろん、労働基準監督行政機関さえそのことを認めず、下河さんは非情にもたんなる私傷病死として葬り去られたのだった。

未亡人の美枝子さんは三池労組の支援のもとに、いまは亡き夫の遺体解剖結果を添えて、福岡労災保険審査委員会に対しただちに〝異議申請〟を提出、あくまで「亡き夫の死はCO中毒による業務上死亡」であることの認定を求めていった。

その結果、福岡労働基準監督局（大塚達一局長）もついに〝業務上死亡〟と認めざるを得なかったものである。

右のことは、三池労組がかねて強く主張し続けてきていることがいかに正しいものであるか、を証明したわけで、これはこれからCO闘争をすすめるに当って、いっそうの自信と確信をもたらさずにはいない。

組合、要求を提出

三池労組は故下河竹次さんの死が「業務上死亡」と認められたことにもとづき、三井鉱山に対し次の要求を提出、交渉にはいった。

一、社葬を営め。
二、弔慰金を支払え。
三、退職金そのほか、業務下死亡者としての精算支払いを行え。
四、福利厚生そのほか、昭和三十八年の大変災遺族同等の補償を行なえ。

見過せぬその実態

じん肺患者囲んで交流

去る四日、三川十一分会、CO患者家族の会、および遺族会の代表たちは、三池じん肺会の代表と交流を行ない、とくに問題のじん肺患者の病状とくらしの実態を知ると共に、これからは四者がさらに交流を積みあげ、手を取り合って闘うことを誓い合った。

CO闘争・命を守る闘いをすすめている三池労組としてはなおさらのこと、日ましに非情な生き方に追いこまれて行くじん肺患者をめぐる問題をこのうえ放置して行くことは、も早や許されなくなってきている。

現在じん肺患者たちは、一部の自宅療養中の人をのぞいて、緑ケ丘診療所に二十六人、芦尾市民病院に十六人、高岡病院に四人、天領町三井本院に十三人、笠原病院に十人など入院・療養している。

これらのじん肺患者たちは聞けば、一日わずか百七十五円という食事費に耐えて行かなければならぬ事実一つ見ても、そのまま見過すことはできないのである。

三川鉱でまた犠牲者

三池労組厳重抗議　組関係に多い事故死

去る七日、今年にはいってから事故続きのうえに、坑内労働条件の悪化が加わってとかく注目されている三川鉱（岡田二郎鉱長）でまたも重大災害発生、今年五人めの犠牲者が出た。

犠牲者は、三井建設係員の高山貫一さん（四十七才、荒尾市緑ケ丘若葉町一六―二に居住）。三池労組は九日チラシをもって全組合員に災害事実を伝え、高山さんのめい福を祈ると共に、ただちに会社側に抗議を提出した。

災害発生は当日の午後二時五十五分。三川鉱の坑口から八千九百九十メートルはいった四百五十メートル坑道のうち、三池島に通ずる連絡坑道の詰だった。高山さんは崩落の下敷となったのである。

同鉱ではその前日の六日にも、和田文雄さん（熊本組、三井建設組夫）が左足首を切断するという重大災害が発生している。明らかに、坑内保安が悪化している何より証拠で、まぎれもなく三井の生産第一主義によって労働者が殺され、また傷めつけられたわけで、職場に怒りが広がるのも当然だ。

三池労組は抗議すると同時に掘進の立遅れの改善、組夫に対する保安教育の強化などを強く要求したが、今年五人の犠牲者のうち三人までが組関係の労働者である事実は、大きな問題を投げかけている。

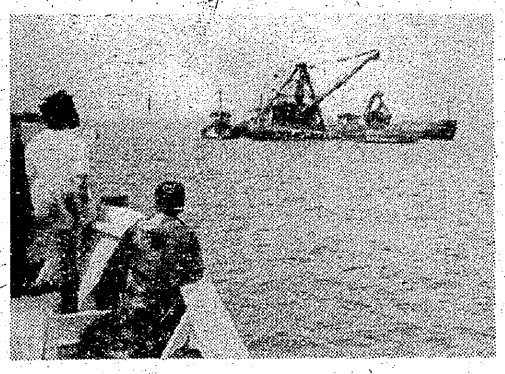
う崎元知事逝去

去る十一日、う崎多一元福岡県知事が逝去された。ガン性腹膜炎というから、どうしようもなかったものだろう。行年六十六才。謹んで哀悼の意を表したい。

炭労新役員

さきの大会で決定を見た炭労の新役員は、次の通りです。

中央執行委員長　里谷和夫（平和）
〃副執行委員長　森田久雄（大夕張）
事務局長　宮本健治（貝島）
〃次長（総務・財政）　小田桐幸男（清水沢）
〃　野呂潔（芦別）（組織・教宣・共闘）
〃　植村善勝（幌内）（労働・保安）
〃　木村勝郎（赤平）（福祉・政治・法対）
九州地方本部執行委員長、兼事務局長　山田道雄（高島）
指導部長　古賀徳継（三池）
なお、北海道地方本部と会計監査は略します。
山本忠義委員長（大夕張）、橋本俊隆副委員長（夕張）、松橋茂事務局次長（労働＝太平洋）ら前役員が退任しました。



港のヘドロをしゅんせつ中。

目に見る公害

大地評海から調査

去る七日、大牟田地評は海の上からの公害調査を行なった。各組合から三十数人の人々が参加、長谷川県議の事実を目の前においての説明にあまりのひどさに言葉もなかった。

港のヘドロを三井は海に運んでは棄ててかえり見ないが、そのためたいらぎなどの貝類がぞくぞく窒息死しているなど悲惨な話だった。

小指の痛みは全身の痛み (1)

港務　若松沢清

筑豊である夜私は、沖縄を考える会の若者たちの話に耳を傾けていた。川西さん――沖縄の筑豊化ということがいわれている。権力側の収奪の論理は、全軍労をはじめ沖縄の民衆の抵抗を圧殺しながら正に筑豊化を具体化している。しかし、たとえ政治的経済的に沖縄が権力側の意図に屈したとしても、沖縄の民衆の精神史―文化と置きかえてもよい―は日本人の心の原点としての輝きを決して鈍らせはしまい。むしろそれ故にこそ、私たちは単に状況論としてではなく、沖縄民衆の意識構造と私たちのそれを照らし合わせながら「わが沖縄」としてその重みを把え、自己に内実化した階級意識を構築したい。

曽山さん―沖縄返還協定が調印された六月十七日、私は改めて私自身日本人であることを強く意識せざるを得なかった。私にとっての沖縄はこの一点を除いてはもはや存在することはない。祖国復帰から反戦復帰へと転回した沖縄の人々の闘いが、ついに復帰拒否にまで思想的質を凝結させたとき、私たちは彼等に介在する歴史的懸隔の深さに見合う歴史的視野の拡大を、私たちの内部において要求されているのだということを忘れまい。

若者たちの熱した言葉に聞き入りながら、私はふっとかつて「三池移住五〇年の歩み」を編集のため訪れた先輩の、怒りをこめた話を思い浮かべていた。

大本営のつぎはぎだらけの強気の戦果発表に拘らず、サイパンが陥ち、敵機動部隊が沖縄周辺に結集し、本土決戦の様相が日一日と国民の眼に明らかになりつつあったある日、三池港の北岸壁に沖縄疎開者を乗せた御用船が入港した。同じ孤状列島の島人（シマンチュ）として、新港倶楽部で湯茶の接待をし、その長途の労をねぎらった。思わぬ島人の歓待に一同大喜び、手を取り合い、涙を流して暫し語り合った。話によれば突然の降って湧いたような疎開命令で、それこそ取るものもとりあえず追いたてられるようにして乗船させられたとのことである。足手まといになる老人、妊婦、幼児ばかりの集団で、大きな風呂敷包みを背負っているもの、ゴザを抱いているもの、コウモリ傘を肩にしているものさまざまで頭にのせているザルには黒砂糖のかけらや、味噌を丸めたのがはいっていた。

小憩後別れを惜しみながら、引率者に従って予定地の疎開先へ足どりも重くのろのろと行進して行く姿はひとしお哀れであった。頭にザルを乗せた見なれぬ奇妙なくたびれた一団に街行く人々は、彼らの置かれた悲惨な運命に、家族と離れてこの先どうなるのか、不安な眼差しにあふれている深い悲しみに、激励を与えるでなく、ただ指差し笑っていた。